吸血鬼の花嫁様

紫姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吸血鬼の花嫁様

【Ｎコード】
Ｎ６６５４Ｗ

【作者名】
紫姫

【あらすじ】
普通の女子高生である林原　萌絵。
でも、ある美少年達に出会うことで運命が動き出す。
忘れていた約束。
失われていた記憶。
彼らとの関係。
接触する度に思い出されていく。

彼らの目的は？正体は？

危ない恋いに溺れていく萌絵。

もう、元には戻れない！？

はじまり（前書き）

この小説は、ファンタジーと吸血鬼と恋愛とバトル系などが好きな作者が生み出した作品です。

ファンタジー系など嫌いなお方は見ない方が良いですよ。

日本人ですが日本語が危ういです。
脱字や誤字、表現が可笑しいかも知れませんが見逃して下さい

上記を読んだ上で、問題ナイ方のみご観覧下さいませ

はじまり

私は…

「お前が、高貴な血を持つ花嫁か？」

ただ…

「生きていたいならば、俺達の中から選べ」

普通に生きていたかっただけなのに…

「さあ…」

ヤメテ

そして大きな手は私の首を――――…

「うわあああああああ！？」

ガバッと勢い良く起き上がる。

「夢…？」

ため息を吐く。

「なんだったの？夢にしてはリアルだったなぁ」

重い体をゆっくりと起こし、着替える。

これが、悪夢の始まりだった。

「萌絵おっはよ～」

「ん？おはよ」

ボーッとしながら歩いていると後ろから、トンッと誰かに小突かれる。

「麗奈、相変わらず元気だね」

水谷麗奈（れな）。

麗奈は凄く変わった子で、顔立ちの良い男子は嫌いらしい。

「今日も可愛いね！」

「はいはいドーモ」

そして女の子を口説く癖がある。
可愛い子だが、本当に変わった子である。

「ん？あそこ凄い群れ」
「群れとか言わないの！」

萌絵は麗奈にツッコミをいれながら人の群れを目指して歩く。

「明様ぁ～？」
「亮君コッチ見てぇ～」
「涼介様今日もカッコイイわぁ」
「春ちゃん可愛い？」

などと歓声…イヤ悲鳴が聞こえる。

「誰？」

人の群れの真ん中には美少年達が立っていた。
欠点など見当たらないほど完璧である。

「何アレ。超ムカツク」
「いやいや。そんな事言わないの」

なんて事を言っていると誰かに押される。
いや…群れに流された。

「え…ちょ！？」

そして彼らの目の前に飛び出してしまった。

「っ…」

息が止まりそうだった。

あまりにも綺麗すぎて息が止まった。

「大丈夫か？」

手を差し伸べてきたのは黒髪の少年。

「！？」

顔を見た瞬間動けなくなってしまった。

だって…

「おい？」

だって　だって

「大丈夫か？」

「大丈夫…です」

似てたんだ。

「ありがとうございます」

「気を付けろよ？」

夢に出てきた男の人に。

思い出した瞬間苦しくなった。
呼吸がうまく出来ない。
そして意識が…。

「おい！？」

私は彼だけ顔をハッキリ覚えていた。
何故かは分からないけど。

声も、顔も喋り方全てが同じだった。

約束（前書き）

私ハ　貴方ト　約束シタノニ　忘レテイタ…

違ウ…違ウワ

貴方ニ消サレタ　記憶ヲ　約束ヲ　関係ヲ

約束

「…絵」

彼らと会ってから体の調子が悪い。
息苦しくなった瞬間、体が重くなり瞼も重くなり、そして視界が真っ暗になった。

「萌絵？」

目が覚めた時には保健室のベッドに横たわっていた。

「萌絵ちゃん？」

保健医が言うには、黒枝明（あきら）が連れてきて来れたらしい。

「あの～…萌絵さん？」

（そりゃあ…目の前で人が倒れればねぇ…焦るよね）

「オイ聞いてんの？」
「！？」

いきなり肩を掴まれ考えていた事が綺麗に消え去った。

「れ…麗奈？」

目の前には怒りに満ちた麗奈の顔があった。

「何を考えていたのかな？私の声に反応しないで」
しかも物凄く怒っている。
「もしかしてさ…朝の事でしょ」
「え？」
「倒れて迷惑かけたってかんがえてたでしょ」
「あ…うん。いきなり倒れちゃったからさ…」
「アンタってば良い子過ぎ」
「そう？」

萌絵は麗奈の話を聞きながら、視線を中庭に移動させる。
（ん？）
萌絵の視界に明が映る。
あんな綺麗な黒髪を忘れるはずがない。
他の男子は染色をしているので逆に目立つのだ。
（それだけじゃ無い…。凄く綺麗な髪の毛）
太陽の光に当たり、とても輝いていた。
そこらにいる女子とは比べ物にならないくらい綺麗な髪の毛だ。
（サラサラでツヤツヤで…）
顔も女の子みたく可愛らしい。

（女の子みたい）

気付けば、明ばかりを見ていたらしく、麗奈に小突かれる。

「なーに見てんの？」
「へ？」
「あ、黒枝明じゃん」
「え？本当だ」
「朝いたメンツだね」
「そう…だね」
「あいっかわらず人気だね～」

良く見ると差し入れらしき物を持っている女子生徒が沢山いる。

明と三浦涼介（と言うらしい）は無表情で何も言わず女子達を無視している。
黒枝亮（と言うらしい）は笑いながら断っている。
三浦春斗（と言うらしい）は笑顔で貰っている。

「黒枝明と三浦涼介は相変わらず無愛想だねぇ」
「相変わらず？」
「え？知らないの」
「知らないって何が」
「黒枝明と三浦涼介クールでカッコイイって評判なんだよ」
「へえ」

麗奈は無表情で説明してくる。

「無愛想とクールってだいぶ違うような…」

「ファンの子達にはクールに映ってるんじゃない？」
「あぁ…なるほど」
そんな話をしているとチャイムが鳴る。
「ゲ。次体育じゃん」
「急いで着替えなきゃ！」
二人は慌てて更衣室へと走って行く。

明side
太陽が眩しい。
「眩しいなら出なきゃ良いでしょ〜？」
後ろから声が聞こえる。
「春斗…」
後ろを振り向くと春斗が立っていた。
「わぁお。萌絵ちゃん丸見えだぁ」
ベンチに立つとわざとらしく見上げている。

「その格好はなんだ」
「えー？可愛いでしょ？」

ウフフと言いながらクルリと回る。
ツインテールに前髪は眉毛の位置辺りで切り揃えている。
目は丸くまつ毛は長く、誰が見ても美少女である。

「男らしい格好は出来ないわけ？」
「もう、冷たいなぁ」
「くっつくな」

腕を振り払う。

「それにしても萌絵ちゃん可愛いよね～」
「…」
「それに美味しそう。僕が貰っちゃおうかなぁ？」
「……」
「はぁ。冗談に決まってるでしょ？」
「当たり前だ」

明は静かに春斗を睨む。

「でも…約束なんて相手が誰だって良いんじゃないのかな？」
「は…？」
「だって、僕達の家系の誰かが結ばれれば良いって言ってたもん」
「お前まさか…」
「萌絵ちゃん、すっごく可愛くなってるし気が変わっちゃった♪」

春斗はニコリと微笑む。

「それは、違反だぜ」
「だな。春斗はそんなに仕置きを受けたいのか？」
二人の会話を割って入るのは明の兄、亮と春斗の兄、涼介である。
「違反？でもさ、最終的には萌絵ちゃんが決めるんだよ～？」
「春斗お前…」
明が何か言おうとしていたら辺りが騒がしくなった。
「あ、いたわ！」
「本当！凄く探したんですからぁ？」
女子が集まり始めた。

萌絵ｓｉｄｅ

時は放課後。
「林原さん」
「…はい？」
呼ばれたので振り向く。と、５人ぐらいが萌絵を睨んで立っていた。
「えーと…。何か？」
「顔を貸していただけるかしら？」

萌絵は気が付く。

（これ…朝の事だよね？絶対）

萌絵はとびっきりの笑顔で5人を見る。

「無理。私あの人達に興味ないから。じゃ」

萌絵はそれだけ言うと全速力で逃げ去る。

「ちっ。もう少しでアイツ達より先に食べれたのに…」

萌絵に話しかけた女子生徒は僅かに瞳を赤く輝かせ、鋭利な犬歯が唇から僅かに見えていた。

「はあ…。さっきの人有り得ないくらい美人だったなぁ」

息を整えて振り向く。

「大丈夫？」

「あ…」

振り向いた先には明がいた。

「黒枝…明、君」

「ふうん。俺の名前知ってるんだ？」

「だって…女子生徒に人気でしょ？」

二人は向き合う。

「あ…。遅くなったけど今朝は有難う」

「別に…」

明はそっぽを向く。

耳が真っ赤だった。

「明く…」

「萌絵ちゃんだぁ～」

「きゃあ！？」

いきなり誰かに抱きつかれる。

「え…？え…？」

「あ～そっか。自己紹介まだだったね。三浦春斗って言うんだ」

「春斗…君？」

「君いらないよ～」

「え…でも」

「良いから！」

「…春斗…？」

「うん、なあに？」

「離れて欲しいなぁ…」

あぁ。と春斗は言うとパッと離れる。

「ごめんね～つい」

「つい。じゃない」

「イタッ」

ゴツっと音が聞こえて少し視線を上に向ける。

「すみません…。コイツに何かされてませんか？姫」

「いえ、大丈夫ですよ…って姫！！？」

「え…何も覚えてないのですか？」

「…」

「…そう、ですか。申し遅れました、三浦涼介と申す者です」

涼介は片膝を地面に付き、萌絵の手の甲に軽くキスをする。

「へ？あ、よろしくお願いします！！？」

初めてされた事なのかテンパる萌絵。

「ちょっと兄ちゃん！？何してるのさ」

「何って挨拶」

春斗と涼介が睨み合いを始める。

「オイ、お前ら！約束を交わしてるのは俺なの！」

「へ？」

いきなり明に引き寄せられる。

「萌絵は俺の。手ェ出すの許さねぇから」

「え？ちょっと？？」

何が起こっているのか分からない萌絵。

「約束って何？覚えてないって何の事？てか明君の物になった覚えない！」

萌絵は整理がつかないまま軽く叫ぶ。

「取り敢えず、落ち着こう？」

「う…うん」

春斗に言われて深呼吸をする。

「でね、僕達と一緒に来てくれる？」

「どこに？」

「取り敢えず、車に乗ってくれれば良いよ」

軽く強引に車に乗せられ、萌絵達を乗せた車はどこかへ向かった。

約束ハ　チャント　守ッテネ？
裏切ル　ナンテ　許サナイ
ダッテ…　守ッテ　クレルンデショウ？
私ヲ殺ソウト　スル　悪イ　大人　達　カ　ラ　・　・　・

「約…束」

萌絵の寝言が微かに聞こえた。

「…」

明はそっと壊れ物を扱う子供のように優しく萌絵を抱き寄せた。
まるで何かから守るかのように――――…。

吸血鬼（前書き）

萌絵「ど…同居って！？」
明「なんだ？文句あるのか？」
萌絵「どや顔して言われても…」
春斗「文句なんてないよね～？」
萌絵「いや…大アリなんですけｄ」
明＆ａｍｐ；春斗「お前に拒否権なんてナイから」
萌絵「ひぃぃぃぃ」

吸血鬼

あれからどの位時間が経ったのだろう？

「萌絵」

「ん…」

誰かに優しく肩を掴まれる。

「明…君？」

ゆっくりと目を開くと、目の前には明の顔がある。

そして近い。

「あ…わ、私寝てたのか…」

急に恥ずかしくなり、前髪を直す振りをしながら横を向く。

「立てるか？」

「う…うん」

明の手を掴みながらゆっくりと立ち上がる。

「え…ここ」

車から降りるとそこは、大きな屋敷が建っていた。

貴族が住んでいそうな豪邸を目の前に、萌絵は呆然とする。

『明様…』

「え…？」

どこからか透き通った美しい声が聞こえる。
そしてふわりと甘い匂いがした。

「だ…れ」

目の前には見覚えのない美しい女性が立っていた。

『萌絵…』

そして女性の目の前には、明と呼ばれた男性が立っていた。

「明…君？」

男性は微かに見覚えがあった。

今朝出会った男子生徒に似ている。

いや…もしかしたら彼なのかもしれない。
何故そう思うのかは分からない。

「萌絵？」
「へ…！？」

驚いて声の聞こえた方を見ると明が心配そうに覗き込んでいた。

「どうかしたか？」
「ううん！なんでも無いよ」

萌絵はニコッと笑うと先程見ていた場所に視点を戻してみる。
だが、何もなかった。

「萌絵ちゃん、明！早く～」
「え？あ、うん！」
「今行く」

春斗に呼ばれて二人は駆け足で階段を上っていく。

屋敷の中に入ると、沢山のメイドが出迎えてくれた。

「主がお呼びです」
「了解…」

明は深呼吸すると、萌絵に向き直る。

「姫…こちらに」

萌絵を主と言われている人が居るであろう部屋の前まで案内された。

「明君…ここは？」
「入って…」

言われるがままに入ろうと扉をノックすると、扉が軋みながら開いた。

「どうぞ？」

優しい声が聞こえる。

「し…失礼します」

萌絵がゆっくりと部屋の中へと入る。

他の４人も後に続く。

部屋の中は薄暗く、壁には綺麗な装飾品が施されたランプが飾られている。

カーテンは外の光を一切通さず、完全な闇を作っている。

「お主が、林原萌絵か？」

声の主は赤いカーテンで閉められた空間にいるらしい。

中にもランプがあるのか影だけが見える。

「何故…私の名前を？」

「さあ…なぜだろうね？」

声の主は笑っているのか微かに影が揺れる。

「私はお主の顔を見てみたい」

影が大きく揺れたと思うと、カーテンが開いた。

「ッ」

とても美しい人が姿を現した。
男にも見えるし女にも見える。
しかし、どこか懐かしい感じもした。

「萌絵とやら…近くに来てくれぬか？顔をもっと近くで見てみたい」
「は…い」

体が勝手に動く。
何かを求めてゆっくりと動く。
自分を呼ぶ声しか耳に入らない。
歩く音すら聞こえない。
脱力感に似た何かに襲われた体が人形のように動く。

カーテンで閉めきった空間の目の前に辿り着いた瞬間、想像もしなかった強い力で引っ張られる。

「！？」

気が付くと、萌絵は主と呼ばれているであろう人の上に乗っていた。

「わ…私」
「大丈夫だよ。さあ全てを私に預けて？」
「…」

また何も考えれなくなった。

主と呼ばれた者はリボンタイを外すとゆっくりとYシャツのボタンを外していく。

少しだけ脱がすと、白い肌が露出する。
「相変わらず綺麗な肌をしているな」
主は萌絵の首筋に舌を這わせる。
「…っ」
一瞬、萌絵が体を動かす。
その反応を見て微笑む主は唇から鋭い犬歯を見せるかのように出す。
そしてその牙を萌絵の白い肌に突き刺そうとした瞬間、誰かに邪魔された。
「…明」
「主…もう良いでしょう？」
邪魔をしたのは不服そうな顔をした明だった。
「萌絵は、お前だけの物じゃないぞ？」
「俺のですから」
明はまだ暗示にかかっている萌絵の唇を奪った。
「ん…んぅ！？」
萌絵は暗示から覚めたのか驚く。
明の胸を力いっぱい叩く。
それが精一杯の抵抗らしい。

「はっ…」

やっと解放され肩で息をする。

「むぅ…ズルイぞ明」

主はぷくぅと頬を膨らます。

「わ…私いったい…」

萌絵は顔を真っ赤にさせながら整理をしている。

「お前は主に襲われかけたんだよ」

「主？」

明が睨んでいる方を見る。

「アナタが…主？」

主はニコリと微笑むと萌絵の耳元で囁く。

「主ではなく、レイ…だよ？」

「！？」

萌絵は耳を塞ぐ。

顔が真っ赤なままレイを見る。

「なぁ！？」

レイは楽しそうにクスクスと笑う。

「これからが楽しみだなぁ」

「コンの変態！」

殴りかかろうとした明を春斗が殴ったとか殴らなかったとか…。

「…で？」

「で？とは…」

「どこまでされた！？」

「さ…されたって何を！？」

場所は明の部屋。

ソファの上で取り調べ（？）がされていた。

「主に！だよ」

「レイに？何もされて」

「嘘付け！じゃあ、なんでボタン外されてたんだよ」

「知らないよ！じゃあさ」

萌絵はキッと睨む。

「なんで明は私にキスなんてしてたの！？」

「はぁ！？理由なんてなんだって良いだろ！」

「良くないの！」

「うお！？」

萌絵は明に掴みかかる。

「私…初めてだったんだから！」

萌絵は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にさせる。

「好きな人としたかったのに…」

ポロポロと大粒の涙が零れ落ちる。

「きゃ…！？」

いきなり明に押し倒される。

「な…何」

「好きになれば問題ないだろ」

「は？」

「俺の事好きになれば良いだろ」

「何言って…」

「俺ナシじゃ生きられなくしてあげる」

「はぁ！？」

明はニコリと微笑むと、先程着替えたばかりの白いブラウスみたい

なワンピースに手を伸ばす。

「ちょっと何考えて」

シュルリとリボンが解ける音が聞こえる。

萌絵の言葉は届いてないようだ。

ボタンがゆっくりと丁寧に外されていく。

「ねえってば」

抵抗も虚しく、ボタンは腹辺りまで外されていた。

明の大きな手が萌絵の白い肌をなぞる。

そして背中へと回される。

「明君！？」

モゾモゾと動かしているうちに、締め付けが無くなった。

ホックを外されたようだ。

「！？」

ゆっくりと胸に移動していた。

「明君ってば…！」

今までに感じたことのない感覚に襲われながら抵抗を続ける。

明の唇が肌に触れる。

「っ」

チクリと痛む。
何回も何回も。
唇が色んな所に触れる。

「明く…」

明のもう片方の手が太ももを撫でる。

「あ――――…」

叫ぼうとした瞬間扉が勢い良く開かれる。

「萌絵ちゃーん、ご飯出来たよ！って何してるの？」

タイミングが良いのか悪いのか。
春斗が現れた。

「ん…春斗。なんだ」
「なんだ、は僕のセリフ！僕達の萌絵ちゃんに何してるの！？」

春斗は明を引き剥がすと、萌絵に抱きつく。

「大丈夫！？まだ何もされてない！？」
「ええと・・・ギリギリ」
「まだ処女のまま…グフ」
「それは余計でしょ」
「ってあー！」

「な…何？」
「コレ…キスマでしょ！」
「へ？」

萌絵は壁に掛かっていた大きな鏡を見る。
色んな所に赤いモノが浮かび上がっていた。

「なぁ！？」
「萌絵」

明は静かに呼ぶ。

「明君、あのねぇ」
「良いから話聞けって」
「何よ」

明は一呼吸置き話し出す。

「キスマークは俺達、吸血鬼からすると首輪のような物だ」
「へーってはい！？今ヴァ…ヴァンパイアって」
「あれ？言ってなかったか？俺達は吸血鬼（ヴァンパイア）だぜ？」

萌絵は口をパクパクさせている。

「つまり、お前は吸血鬼の花嫁に選ばれたワケ」
「そんな事…あ、ありえない！」

萌絵の声は屋敷中に響きわたった。

「あーあ。明の奴バラしちゃったのか～」
「お前に似て明は馬鹿だな」
亮を見ながら涼介は溜め息を吐く。
「これからどうしたものか」
「それを考えるのが涼介の役目だろ？」
「仕事を増やして良いなんて一言も言っていないが？」
「まあ気にすんなって！」
バキと何か不吉な音がした。
涼介はどこか清々しそうであった。
とんでもない生活の始まりになるとは萌絵は思っていなかっただろう…。

ドッキドッキの新生活☆（前書き）

明「まるで新婚生活のようだね…」
萌「鬱陶しいなぁ…てか結婚した覚えないんだけど」
春「萌絵ちゃん、こんな変態に近付いちゃいけないよ？」
萌「そうだね」
明「え…ちょっと！？」

ドッキドッキの新生活☆

「…で？」
「で？とは？？」

萌絵の悲鳴が屋敷中に響いてから１０分後位に明はレイに呼ばれていた。

レイは玉座みたいな椅子に足を組んで、明を見下ろしている。
明はと言うと、腕を後ろで縛られた上に顎を足で持ち上げられている。

「誰が萌絵に正体を教えろと言った？」
「え…いや…誰も言ってません」
「じゃあ何故教えた？」
「春斗」
「ん？」
「春斗が変な事ぶ！？」
「言い訳はイケナイねぇ」

レイが笑顔で明の鼻を蹴る。

コンコン
控え目なノック音が聞こえる。

「はい、どうぞ」

ゆっくりと扉が開かれる。

「失礼します…って何してるんです？」
部屋に入って来たのは萌絵だった。
「何って…お仕置きだよ？」
「痛いっての！」
レイは笑顔で明の顎を蹴り上げる。
「あ…あはは」
萌絵は乾いた笑いをする。
「あ…用ってなんですか？」
「あぁ、そうそう。こっちに来て？」
萌絵は恐る恐る近付く。
「！？」
萌絵はレイに腕を引っ張られる。
「あ…あの！？」
気付けば、レイの腕の中にいた。
「さて」
「！？」
シュルリとリボンを外される。

「あの…何してるんです？」
「何って…ボタン外してる」
笑顔で答えるレイ。
「やめて下さい！」
抵抗するが、結局付いているボタン全て外された。
「ふむ…かなり付けられているな」
レイは露になった萌絵の素肌を見て黙り込む。
「明」
「はい…グフ」
レイは明を呼ぶと腹を蹴る。
「主…みぞおち」
「萌絵、後でメイドに部屋を用意させるからそこで寝なさい」
「あ…はい」
「寝る時はちゃんと鍵を掛けとくんだよ」
「はい」
ボタンとリボンを直すと部屋から出す。

「ふう…。そろそろ寝ようかな？明日も学校あるし」

ベッドに入ろうとするが、レイに言われた事を思い出す。

「あ…鍵」

鍵はドアノブとチェーンの二つ付いている。

「よし…と」

萌絵は電気を消してベッドに入る。

「ん…」

微かに外から鳥の鳴き声が聞こえる。
カーテンの隙間から光が漏れている。

「もう…朝か」

萌絵はゆっくりと寝返りする。

「！？」

目の前には春斗が寝ていた。

「っ！！？」

ビックリしすぎて思い切り飛び起きる。

「にゃあ！？」

寝ぼけている春斗に抱きつかれてベッドから落ちる。

「いたたた…」

「ん？あ、おはよう萌絵ちゃん」

「…おはよう」

春斗は笑顔で見下ろしている。

「姫、大丈夫ですか！？」

バン！と勢い良く開かれる。

「あ…涼介」

涼介の顔がみるみる鬼のようになって行く。

「春斗…」

「ちが！？誤解だっていただだだ」

涼介に笑顔で頬を引っ張られる春斗。
「どうやって部屋に入ったの？」
「どうって…念力☆」
バキ
不吉な音が聞こえた。
「さあ姫、朝食の準備が出来てますし、行きましょうか」
「は…はい」
床に突っ伏している春斗を置いて去る。

「萌絵！」
「う…」
朝から誰かに抱きつかれる。
「麗奈…普通に挨拶出来ないの…？」
「だってさ、急に一緒に登校しないって…しかも下校も出来ないって…」
「まぁ色々とね…」
麗奈には言えない事。

それは、王子と言われている人気男子４人と住む事になってしまったと言う事。

「それじゃ、また明日ね」

萌絵は麗奈と分かれると、走って裏門まで行く。

「遅くなってゴメン！」

萌絵は車に乗らず待ってくれている４人に謝る。

「ほら行くぞ」

「うん」

５人は車に乗る。

「麗奈って子には言ったの？」

「え？」

「俺達のこと」

亮が聞いてくる。

「言えるわけないですよ。麗奈、皆の事綺麗ですから」
萌絵は苦笑する。

家に着いてからは、大変だった。
「ちょっと!?なんで一緒に入ろうとするの」
「なんでって当たり前だろ」
お風呂に一緒に入ろうとする明を弁慶の泣き所に蹴りを入れると走り去る。

「ふう…」
ほのかにピンク色に着色されたお湯に浸かる。
「やっぱり広いなぁ…」
無駄に広い浴場を見渡す。
お湯には薔薇が浮いていた。
「…そろそろ上がろう」
上がろうとして立ち上がると、扉が開かれる。

「え？」
「あ」
入ってきたのは涼介。
二人とも固まる。
「きゃーーーーー」

「萌絵ちゃん危ない！」
「え？」
声をした方向を見ると、春斗が突っ込んでくる。
「きゃあ」
「うわあ」
ドン
二人は勢い良く倒れる。
「いったぁ」
「ゴメン」

萌絵は胸に違和感を感じる。
「…春斗」
「……」
「いつまで触ってるの！？」
バチーンといい音が鳴った。

「はあ疲れた」
「だな」
「うわあ！？」
いつの間にか隣に座っている亮に驚く。
「どうやって入ってきたの」
「どうって…普通に」
「普通って…鍵壊すのが普通なの！？」
今朝直してもらったばかりの鍵が壊れていた。
「どんだけバカ力…」
「さて、寝るか」
「はい？きゃあ！？」
明は萌絵を担ぐとベッドに放り投げる。
「ちょっと変態来ないで」

「それ傷つくんですけど」
「だから、来ないでよ」
攻防戦が始まる。
結局寝ることになった。
この日常が平和だと誰もが思わなかっただろう。
「我姫…今、そこから助けて差し上げますからね」
「ん…」
一瞬誰かの声が聞こえたような気がした。
（気のせい…？）
萌絵はまた意識を手放す。

漆黒の記憶（前書き）

誰か分からない男の子
私の閉ざされた記憶を開放し出す。
そして…

漆黒の記憶

どうして？

どうして俺だけ消えないといけないんだ…

愛して欲しいだけなのに…

姫…

愛　シ　テ　ル

「！！？」

勢い良く起き上がる。

「ゆ…夢？」

目の前には見覚えのある風景が見える。

「なんだったの…」

皆とは違う吸血鬼が血まみれの腕で私を抱き締めた。

愛おしそうに。

怖い。

でも、懐かしい。

そんな感じがした。

今日は土曜日。
学校が休みだから、中庭を散歩。
今の生活になってからと言うもの、自由に外出が出来ず暇を持て余している。

「なんか面白い事ないかなぁ」

何も考えずブラブラしていると、薔薇ばかりが咲いている温室を見つけた。

「薔薇ばかり咲いている…」

なんとなく入ってみる。

少し錆びているのか軋みながら扉が開かされる。

「わぁ…綺麗」

辺りを見渡しながら歩くと微かに声が聞こえた。

「誰か…いるの？」

微かに聞こえる声を頼りに進んでみる。

「…」

奥まで進むと、薔薇にまみれて全てが黒色の男の子が寝ていた。

「誰…だろう」

萌絵はその場に座り、まじまじと見ている。

「…」

「…」

お互いの息がかかりそうなほど近くに顔がある状態で彼が目を覚ましてしまった。

「誰」

「あ…えと…」

萌絵は驚いて離れる。

「アンタ…」

「は、はい」

「ここの屋敷に住んでんの？」

「え？…はい」

男は萌絵を凝視する。

「もしかして…」

「！？」

いきなり近付いてきて何かを確かめる。
「あの人と同じ香りがする」
「香り…？」
ゆっくりと顔を上げてニコリと微笑む。
「美味しそうな血の香りがする」
萌絵はゾクリとする。
「もしかして吸血鬼？」
「へえ…知ってるんだ？まだ目覚めてないのに」
「目覚め…？」
クスクスと笑いながら萌絵の耳元で囁く。
「俺の名前は坂本黒斗」
「坂本…黒斗…？」
懐かしい…気がした。
でも何故懐かしいのか思い出せない。
「忘れている記憶を思い出させてあげる」
「ん！？」
いきなりキスをされる。

「姫…愛してる」
「黒斗…何を…！？」
いきなり黒斗に押し倒される。
「姫の全てが欲しい」
「…」
黒斗が本気であることが良く分かる。
だからこそ私は胸が苦しくなる。
だって…。
親と子、兄弟との恋愛は許されないのだから。
「許されない。だなんて誰が決めたの？」
「それは…」
確かに誰が決めたのか分からない。
「黒斗！？」
黒斗はいきなりボタンを毟り取るような感じで服を雑に脱がす。
「何を！？」
私は自分が出せる力を出して抵抗をする。
抵抗をすればするほど傷が増えていく。
白い肌に赤い線が入っていく。

「お願いだから…」
これ以上黒斗が進めて行くのなら
きっと
命は無いはず。
彼らが
許すはず
ない…のだから。

「何をしている？」
ほら。
運命の歯車が回り出した。
「涼介…」
私は安堵した。
でも…これは絶望でもある。
「何をしている…と俺は聞いている」
涼介は細剣を黒斗の首に軽く刺していた。
「姫の前で物騒な物出すなよ…騎士様？」

自分が殺されるかも知れないのに呑気に話す。

「…離れろ」

涼介は少しだけ力を込める。

「何故？吸血鬼は本能のままに生きるべきだろう？」

黒斗はクスクスと笑う。

「涼介だって本当は姫が欲しいくせに」

涼介は一瞬力を緩める。

その瞬間を待っていたかのように黒斗が涼介を投げ飛ばす。

「涼介！！」

「おっと…姫？逃がさないよ」

「離して…！」

私は抵抗するために暴れた。

「ッ！？や…ン…ふッ」

「抵抗なんてやめなよ。敵うわけないじゃん」

意識が遠のいていく。

まるでもう一人の自分が目を覚ましているかのように…。

そうだ。
昔お爺様が言っていた。
『吸血鬼に口付けをされると、主従関係を契る事になるんだよ。気を付けなさい』
そう、私は今…黒斗と――――――。
「そんな事…させない」
「――――――え？」
目の前に赤い液体が広がる。
「黒…斗？」
黒斗がゆっくりと倒れて来る。
「姫…愛シて」
ゆっくりと目を閉じる。
「…」
目の前で仲間が死んだ。
否。
違反行為をした彼は私の騎士に殺された。
「…」
彼は当然の報いを受けた。

でも悲しくて目から涙が止まる事泣く沢山溢れ出る。

「姫…」

涼介は私を見つめたまま何も言わず傍にいてくれた。

「――――め」

誰？

「姫」

涼介？

「姫、起きてください！」

ゆっくりと萌えは目を開ける。

「…あれ、私」

重い体をゆっくりと起こす。

「こんな所で寝ると風邪ひきますよ」

「う…ん」

萌絵は涼介に支えられながら歩く。

「…」

何かを忘れている。
誰かと…会ったような気がする。
でも思い出せない。

「姫…いずれは、ね」

黒斗は萌絵と涼介を目で追いながら笑う。
瞳は赤く輝いていた。
まるで飢えている獣のように…。

漆黒の記憶（後書き）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6654w/

吸血鬼の花嫁様

2011年11月6日03時18分発行